

シネマ日記



No. 63

○月×日 米連邦捜査局(FBI)の初代長官として48年間、死ぬまで権力の座にあり、その間に就任した8人の大統領を恐れさせたJ・エドガー・フーヴァー。そのアメリカ現代史の影の部分を実現した狷介な権力者の人生を内面に迫って描いたのが「J・エドガー」である。クリント・イーストウッド監督の最新作だ。物語は1960年代後半、フーヴァーが公式の回想録を残すべく、自らの過去の業績を担当官に語る形式をとって進められていく。共産主義がアメリカに入ってきた19年、FBIが創設される前の司法省に入ったフーヴァー青年(レオナルド・ディカプリオ)は赤狩り

らない。特殊メイクとはいえ晩年までを演じたデカプリオや秘書役のナオミ・ワッツが熱演している。

○月×日 ソウル郊外のアパート。ヘルパーをしながら中学生の孫と暮らしている老女。物忘れを感じ、アルツハイマーの初期と診断されたこともあり、街で見かけたカルチャーセンターの詩作教室に通い始める。子どもの頃、詩を誉められた思い出があったからだ…。こうした今日の社会風景は日本も韓国も全く変わらないものをつくづく思う。物語は詩をどう書くかわからない彼女が、先生の教えに従い、見たもの感じたものをノートに書き写すことから始める。といっても、すぐに言葉が生まれてくるわけではない。が、そうした平穏な日々はある日、突然打ち切られる。中学生の孫息子が友達と一緒に同級生の少女に性的暴行をして、その少女が自殺してしまったのだ。「ボエトリー／アグネスの詩」(イ・チャンドン監督)の老女の詩作の旅は、その日から一変する。老女の心はしだいに自殺

に邁進し、出世階段を上っていく。若くして初代FBI長官になった彼は、リンダーバーグ愛児誘拐殺害事件の犯人逮捕や大物ギャングの逮捕などで名を上げる。それら事件の解決を通して、指紋記録の整備など近代科学捜査のきっかけを作り、州をまたいでのごく広域捜査権などFBIの強大な権力を掌中にしていくのだが、一方で黒人指導者キング牧師の公民権運動を徹底的に妨害するなど、生涯にわたって共産主義的なもの脅威にとりつかれていた。歴代大統領に対しても、盗聴などにより秘密ファイルを作成、スキヤンダルを手にしたのだ。徹底した秘密主義、冷酷な権力主義の影の部分を知るのも興味深い、それだけでなくフーヴァーの内面、母親から離れられない弱い男であったことや女装趣味やゲイであった秘密の部分などに触れ、歪んだ権力者像を見事に描き出している。愛児の遺体やゲイ同士のハードキスなど、はっとさせられる場面もあり、イーストウッドの男臭い職人技の演出がたま

した少女に寄り添うようになり、詩が紡ぎだされていくのだった…。詩が持つ美しい世界と現実の醜い世界善と悪などが重層的に浮かび上がり、生きていくことの重みが静かに、悲しみとともに伝わってくる…。

○月×日 01年「9・11」の悲劇は、日本人も津波と原発の大震災に遭ったことで共有するものになったが、その本質は、突然、肉親や友人など愛する者を失った悲しみだ。「ものすくくうるさくて、ありえないほど近い」(ステイブ・ダルトリー監督)という奇妙なタイトルの映画は、ワールド・トレードセンターで、愛する父を亡くした少年の喪失感を追体験する物語だ。失うことは忘れることで癒されはしない…。

○月×日 「ALWAYS三日月の夕日64」(山崎貴監督)は夕日シリーズ3作目。前作より5年後、東京オリンピック開催の64(昭和39)年が舞台。いよいよ高度成長が始まっていく年…。皆が前を向いて、夢を見ていたのだなあと、しみじみ思う。(内藤哲)